

# 宗教的情熱に生きるこは

小 林 篤 演

宗教的情熱に生きるこは、宗祖の胸中に成立せし信念を自家藥籠中のものとして、現代社會に信仰の情熱を以つて生きたる事である。此の情熱は、我々が宗乘を自家藥籠中のものとする事に依つて、「此の事云はずばある可らず」と云ふ情熱となつて、自ミ血潮が如何なる障害をも突き破らずばミ云ふが如き勢を以つて押し寄せて来る。併し宗乘があり、傳燈があり、相傳が尊重せられる限りに於いて、宗教的情熱に生きる人に對して、異安心者であるかの非難が、往々にして荷せられるのを見る。果して何處まで其人が異安心であるかは、容易に輕々しく斷定を許さない。我々が社會人である以上唯單に宗乘の傳襲者であつてはならない事は勿論であり、社會思潮の變遷ミ宗乘も伴はなければならぬ事は誰もが口にする所である。茲に宗乘を如何に自分のものとするかに問題があり、宗乘ミ自分ミが對立させられる、此の事は家庭に於ける親子關係の中にも發見される、父親の時代ミ息子時代の時代ミは對立させられる、息子のクロノスは父親のウラノスを斃して取つて代つた。其以來多くのクロノスは多くのウラノスを斃し多くのジェウスは多くのクロノスを斃して取つて代つた。斯様にして人類の歴史は繰り返しつつ進んで居る。唯人間のクロノスは神話のクロノスの如く鎌を以つて父親の罌丸を切つたり、人間のジェウスは如く父親の頭に、電光を投げかけたりしないのみである。宗乘も常に多くのクロノスが出てウラノスを斃し、多くのジェウスが出てクロノスを斃さなければならない。斯くてこそ宗乘は時代の思潮の歩調ミ合し、指導者たり得るのであつて、クロノスであり、ジェウスであつてこそ、眞に宗教的情熱に生

きる人云へる。

歴史が常に書き更へられ繰り返へされる如く、宗乗も常に新しく書き更へられ、繰り返へされなければならない、此の場合一つの源から發した水が、次第に河床を穿ち、他の流を合はせて進むにつれて、附近の土地を灌漑して行くのと同じ考へる時、宗乗は書き加へられこそすれ、書き更へられない。宗乗が本質的に、内面的理由によつて書き更へられる條件は、單に今が昔になるばかりでなく、昔が今である所、即ちそれが單に過ぎ去つて了つたものでなく、今に猶ほ働き影響を及ぼして居る所にある。斯様な所は存在の秩序に屬しない現在に生る自分である。三木清著「歴史哲學」に於いて、歴史を存在としての歴史と事實としての歴史とに分つ所からすれば、宗乗は自分と對する關係にある宗乗は存在としての宗乗であり、自分は事實としての宗乗（存在の根據）と云ひ得ると思ふ。此の場合の自分は單なる意味の自分でなく、宗乗を自家藥籠中のものとする云ふ行爲的事實の意味を含む自分を意味する。ものとする云ふ行爲的事實を含む以上、此の時の宗乗はものとした宗乗で、存在としての宗乗であつて事實としての宗乗は、存在としての宗乗に先行する。即ち事實としての宗乗より存在としての宗乗が生ずるのである。

ものとする云ふ事實としての宗乗の立場のみからは、即ち事實としての自分の立場からは、宗乗の傳燈は、各々の先きなるものが後なるものに於いて、繼續せられ、補充せられ、擴張せられ、各々の後なるものが先きなるもの結果、充實、高昇して現はれる一の傳燈であつて、各々の新しきものの中に既に次の新しきものが、芽生へ生長する様な過程である。所謂有機體的發展の思想であつて、自分と宗乗とが即ち、存在の根據と存在とを單に連續的に見るのである。それは過去の宗乗を對象として唯單に解釋するのみに停る、所謂一つの源から發した水に、次第に多くの川水が加はる云ふ見方で、宗乗が書き更へられ、繰り返される云ふ事は云はれないで、唯書き加へられるのみである。此れは眞に宗教的情熱に生きるさは云はれず、單に宗乗の解釋附加に停る。

眞の宗教的情熱に生きる事が可能である爲には、存在（宗乘）と存在の根據（自分）とが連続的である一方、超越的非連續的關係がなければならない。人間に依つて作られたものが、作られたものでありながら、逆に其を作る自分に作用し壓迫する云ふ事がある。此の關係は人間の體驗と表現との關係に依つて明白となる。體驗は意識を意味し、而も感情的なもの氣分的なものを含む、之れは背後に主體的な事實に依つて、規定されて居る事を意味し、事實が存在に對して無き云はれるのである。事實は意識でなく却つて、意識を規定し自己を其中に表出するものである。體驗と表現とは對立的連續的關係にある。存在としての宗乘は事實としての宗乘に對し、否定的に對する方面がある。事實としての宗乘が體驗とされる時、此の體驗が自己を表現する場合、存在的宗乘と結び付ける必然性がない、體驗と表現と云ふ關係は全く自己充足的な過程と見る事が可能であり、事實は否定的契機（現在が瞬間であつて未來への否定的契機）を含む故に、自己を實現する場合に、過去の宗乘と結び付かざるを得ない、茲に於いて事實も自己を生かし、自己を發展せしめ得る。併しながら同時に過去の宗乘は事實を制限し抑壓する。事實としての宗乘は自己の對立物たる、存在としての宗乘に於いて、自己を實現する、此の時過去としての宗乘に結び付く事を通じて、自己の存在を規定する。此の關係に於いて始めて誤りなき宗乘の發展がある。存在としての宗乘は事實としての宗乘の發展形式であり、事實としての宗乘は、其舊き存在形式を破壊し、新なる存在形式へと發展する。即ち存在は其自身連續性を持つ、事實は非連續的に喰ひ入り、存在は此の切れ目を繕ひ連續を恢復する。宗乘を自家藥籠中のものとすること云ふ場合、此の辯證法的關係があつて初めて、正しい宗教的情熱に生きられ、それに依つて宗乘が新しく書き更へられ、繰り返へされるのである。宗乘は因襲から救はれ社會の指導能力を有する事となる、愛宗護法は忠實なる宗乘の字句の解釋家に依るよりも、寧ろ異安心視される宗教的情熱家に依ること思ふ。

以上拙論を献ぐ未だ研究の初步にして三木清著「歴史哲學」の模寫にも等しいもので深く慚愧するものである。